一瞬間に反映する心の迷い

津守　真

一学期のはじめごろのことである。私は新入園の三歳児の部屋にいた。ふと気がつくと、うしろに、四歳児のKaちゃんが立っている。「どうして、ぼくの部屋にきてくれないの」と言う。Kaちゃんとは、昨年、ときどき遊んだ。私は、よばれて、何だかうれしくなり、すぐにKaちゃんについて、廊下に出た。

Kaちゃんは、自分の部屋の入口で、廊下に立って、私の顔をみつめた。私も、Kaちゃんが立ち止まったので、じっと立っていた。Kaちゃんは、にこにこした表情で無言である。私は親しさを感じながら、しばらくじっとしていたが、何か、それだけでは私の存在が圧力にならないかという心配な気持が一方には湧き起り、他方には、室内で他の子どもたちが賑やかに遊んでいるのに目がとまって、部屋の中に一歩、足を踏み入れた。これが問題だったとじきに感じたのであるが、気が付いたときには、すでに、何人もの子どもたちの目に出会っていた。

たちまち、お店やさんらしいことをしていた数人の子どもたちが、紙をまるめて作ったチョコレートなどを私に差し出した。私も食べるまねをしたり、会話をかわして、みんなもうれしそうだったし、私もたのしかった。Kaちゃんも後の方に一緒にいた。

その遊びにまきこまれ、しばらくして、ふと気がつくと、Kaちゃんは、いつのまにか、見えなかった。けれども、私は他の子たちにかこまれて、その場を離れるわけにはいかなかった。

その日、Kaちゃんは、私のところにもはやこなかった。

その後、ときどき幼稚園にいったとき、私は、Kaちゃんと顔を合わせることがあっても、再び私に親しさを寄せてきたことがない。Kaちゃんは友だちと遊ぶことが面白くなって、遊戯室や庭を走りまわっているから、それでよいのだが、私がKaちゃんから笑顔を向けてもらえなくなったのは、あの一瞬にあったのだと思う。

あの一瞬、私を迎えにきてくれたKaちゃんと部屋の入口の廊下に立ったとき、私の心は、Kaちゃんと、クラス全体との間を揺れ動いた。もし私が他の子どもたちと遊びはじめれば、Kaちゃんも他の子と遊ぶチャンスになるかもしれないという、先走った配慮と期待とが頭の片隅に動いた。その思いが、室内に一歩を踏みこませ、私の心の動揺を具体化した。あと数分間を廊下で過していたならば、Kaちゃんの方から私を連れて室内に入ったかもしれない。そうしたならば、その後もKaちゃんとのつきあいはつづいただろう。

いままでにも、何度か、私は類似の体験をしている。一度はなれた子どもとのつきあいを、もとにもどすには何か月もかかることもある。そのきっかけは、一瞬間の中の自分の心の動揺である。多分、日頃の心の迷いが決定的瞬間に反映するのだろう。